

氏名	津山朝子
学位の専攻分野の名称	博士（言語学）
学位記番号	甲文第165号（文部科学省への報告番号甲第554号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2015年2月27日
学位論文題目	ドイツ語不変化詞に関する通時的・類型論的研究 —dochとその周辺—
論文審査委員	（主査）教授 小川 暁 夫 （副査）教授 宮下 博 幸 教授 伊藤 了 子

論文内容の要旨

近年、コミュニケーション学の発達により、ドイツ語学においても「心態詞」(Abtönungspartikel) 研究が盛んとなってきた。心態詞とは、本来それ以外の意味を持つ語の特別な用法で、話し手の心的態度を表す機能語のことである。その萌芽的研究となった Weydt (1969) 以後、心態詞研究は詳細に行われてきたが、その多くは用法についての分類学的視点に立脚したものであり、心態詞というカテゴリーがどのようにして発生したのか、またなぜ心態詞という意味機能が生じたのかという点に関しては、いまだに十分な考察はなされていないように思われる。そこで本論は、従来の分類学的な用法列挙を超え、通時的な観点に立ち、心態詞の発生と機能の変遷をたどることを目的とする。

その際、中心に扱われるのは doch という語である。この doch は接続詞、接続副詞、心態詞、応答詞という4つの意味機能を持つ語であり、その多機能性は他の不変化詞には類を見ない。そこで、doch の全容を明らかにすることができれば、多くの不変化詞に通底するメカニズムの一つが解明できると推測し、本論の考察対象とした。

第1章において、現代ドイツ語における doch を考察した。doch には逆接の接続詞、逆接の接続副詞、応答詞、心態詞の機能があり、それらには「対立性」という共通の意味基盤があることを示した。

第2章では、Hentsche (1986) を用いてゴート語、古高ドイツ語、中高ドイツ語における doch の意味機能を調査する中で、心的態度を表す用法は古代から存在していたことが確認された。また、Grimm's Wörterbuch における doch の例文を観察し、応答詞としての doch は最も後発の機能であることが認められた。

第3章では、ドイツ語において doch とその類似語を比較した。語源を同じくする jedoch、「対立」という意味内容を持つ接続詞という点で類似する aber、心態詞以外に応答詞としての機能を持つという点で類似である ja を考察した。その中で、jedoch という強意形の存在があるゆえに doch に文法化が起りえたことを主張した。また aber、ja との比較においては、不変化詞の連辞（複合形式）についても言及した。不変化詞は他の不変化詞と結合して使用されることがあり、結合した場合の意味機能は単独でのそれとは異なる。二つの応答詞が隣接した場合は弱-強という順序で結びつく。同様に心態詞も二つ以上連結して文中に現れることが可能であり、結合した場合は単独の場合と異なる意味機能を果たすことがある点を確認した。

第4章では、ドイツ語と同語族である英語とオランダ語における doch の相当語について観察した。英語

には心態詞に相当するカテゴリーはなく、副詞や法助動詞がモダリティの表出に貢献していた。とはいえ、譲歩の従属接続詞 *though* に「逆接」というよりは、発話の区切りを示す標識の役割をしている場合が見られ、英語の接続詞にも文法化 (Grammatikalisierung, grammaticalization) が起こっている可能性を示した。オランダ語の *toch* に関しては *doch* 以上に逆接の意味が希薄していると推測される例文が多く見られた。逆接機能としては *aber* に相当する *maar* との共起が頻出していたからである。また心態詞機能については *doch* が生起しない場面でも *toch* が用いられていたこともあり、より広範な機能性が看取された。さらに、時間副詞と接続詞・接続副詞が対応する文も散見された。

第5章では日本語の問題を取り上げた。助動詞「だ」終助詞「よ」「ね」に関して神尾の「情報のなわ張り理論」を用いて説明した。「よ」は命題が聞き手のなわ張りにないと話し手が想定している会話に、「ね」は命題が聞き手のなわ張りの中にある可能性を排除せずに話し手が発言する際に使用される。対立型の *doch* と「よ」、一致型の *ja* と「ね」がそれぞれ類似した機能を果たしていることが確認された。

第6章では文法化について論じた。再帰代名詞 *sich* と *bekommen*-Passiv を用いてドイツ語における文法化現象の一端を示したあと、*doch* の文法化について考察した。現代の心態詞は本来の意味機能が文法化して出現したもの、あるいは心態詞機能が文法化というプロセスを経て変容していったものと推測される。逆接の接続詞・接続副詞として機能する不変化詞 *doch* について言えば、アクセント喪失によって、その対立性が希薄化したことが契機となり、心態詞としての機能が生まれたと考えられる。また *aber* や *ja* の文法化についても概観した。*Ja* は「一致」という意味基盤に基づき、応答詞と心態詞として機能していること、*aber* は空間、時間的な意味を経て反復、逆接と意味を変容させたことが確認された。また、接続詞・接続副詞、応答詞以外の様態副詞や時間副詞も心態詞になり得る現象についても言及した。

結論として、心態詞への文法化には、命題のコネクターないしはオペレーターとしての機能がその基盤にあることを主張した。

論文審査結果の要旨

津山朝子氏は「ドイツ語不変化詞に関する通時的・類型論的研究— *doch* とその周辺—」というタイトルで、ドイツ語の「心態詞」を中心テーマに博士学位申請論文を執筆した。「心態詞」という名称は「話し手の心の態度を表わす言葉」という意味である。ドイツ語学の分野では専門用語として定着しているが、日本の研究風土では馴染みが薄い。とはいえ、日本語学においても「終助詞」、また一般言語学では「談話標識 *discourse marker*」として、世界の言語に共有されている普遍的な言語単位である。語用論、つまり言葉を用いて「何を言うのか」ではなく、「どのように言うのか」という領域に属するカテゴリーである。

例えば「関学の文学部はいいですよ」、「関学の文学部はいいですね」という二つの文を比べると、終助詞「よ」と「ね」で話し手が聞き手に対してどのような心的態度でコミュニケーション活動しているのか、教えてくれるところは多い。ドイツ語もその点、変わるところはない。そのための表現手段として、とりわけ「心態詞」はドイツ語において細分化されている。

津山氏はそのうちの *doch* という単語に集中的に取り組んだ。英語の *though* (「にもかかわらず」) と同語源であるこの言語単位はカメレオンのごとく様々な用法をもつ。多くの研究者が「対立」「逆接」「譲歩」「同意」「促し」といった説明を繰り返してきた。日本語の「よ」にも「ね」にも対応し、さらに「しかし」「でも」「やっぱり」「じつは」「どうせ」「さすがに」などとも訳せ、翻訳の際に頭を悩ませる問題児である。明確な意味が規定しにくい単語であるからこそ、ドイツ語圏の研究者でさえ避けて通る、ドイツ語研究の「聖域」の一つとも言える。津山朝子氏はその挑戦的なテーマに取り組んだ。

doch という単語の本質はどこにあるのか、この言語単位を文の中にどのように粉(まぶ)すのか、そし

てそこからいかなる機能が顕現するのか、津山朝子氏はそれらの諸問題を追求した。津山氏は歴史の変遷と言語間相違という縦の軸と横の軸が交差する座標を設定した。そこに単発的な、意味用法の分類だけを自己目的とした研究を超えた独創性・革新性がある。

doch という語の意味用法の歴史的变化を跡付け、説明を試みる一方、現代の英語、フランス語、オランダ語、そして日本語の対応物との比較対照を仔細かつ大胆に行った。言葉のミクロコスモスの分析によって、言語のマクロコスモス、その全体類型の形成に関する理論に通じる実証的なケーススタディを提示することに成功したと言える。

津山朝子氏の研究は日本のドイツ語学の世界ですでに高く評価されている。それはすでに刊行された印刷物と並んで、主要学会での口頭発表からも見て取れる。その成果はさらに深化・発展した形で博士学位申請論文に反映されている。また強調すべきは、氏の研究がドイツ語圏でも認知されつつある点である。国際学会での発表を経て、予備論文は言語学専門出版社である Stauffenburg 社から刊行間近である。

もちろん、今回提出された氏の博士学位申請論文に不備がないわけではない。歴史的データの収集が網羅されていない。現代ドイツ語の実態の分析にもさらなる精緻さが求められる。新たなテーゼの提唱も思惑に留まっている部分がある。ドイツ語と類似するオランダ語との比較も突き合わせによる観察の域を出ていない、などである。また、関連文献の取り込みが優先されるあまり、それらへの批判的対峙が欠けている。このような不備については2015年2月14日に行われた口頭試問においても厳しい意見があった。

それでも、総合的に見るならば、津山朝子さんの論文は博士号取得に十分に値する水準に達している。従来型の「不変化詞」研究、特に「心態詞」研究からの脱却を試みた今後の発展可能性を含めてのことである。その点、審査委員全員、意見が一致した。審査委員の一人から、津山氏の論文は、狭く「閉じた研究」、つまりたこつぽ的に自己充足したそれではなく、広く「開かれた研究」、つまりドイツ語研究者・言語研究者に今後の研究課題を提示したそれであることに最大の功績があることが指摘された。トップダウン的に「ドイツ語の心態詞とはかくかくしかじかである」という一辺倒な記述とは異なり、ボトムアップ的に「ドイツ語の心態詞を研究することが、他の言語、ひいては人間言語一般の解明にいかに通じるか」という重要な諸問題を浮き彫りにしたのである。

以上の結果から、論文審査委員3名は、津山朝子氏が博士（言語学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと判断したことをここに報告いたします。